

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 4 月 1 日現在

機関番号：12102
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22530529
 研究課題名（和文） 東アジアにおける人間観・世界観、社会観、インターネット観の関係性に関する国際比較
 研究課題名（英文） Comparative studies on the relations between ‘people’s views on life, world and societies’ and ‘their views on communication on the Internet’ in Eastern Asia
 研究代表者
 仲田 誠（NAKADA MAKOTO）
 筑波大学・人文社会系・教授
 研究者番号：50172341

研究成果の概要（和文）：本研究の研究代表者は、プライバシー問題への関心、公共性の意識などが日本的な「世間・運命観意識」に強く規定されているという日本の情報社会の実態を実証的・文献的に明らかにし、独、米、英などの研究者の強い関心を引き起こしてきた。その後の調査で「世間・運命観」的な価値観は中国、タイなどでも広く共有されていることが明らかになった。この研究では、こうした点をより広範囲の調査によってさらに解明し、日本や他のアジア諸国におけるロボット倫理や、HRI（ヒューマン・ロボット・インタクシオン）のありかたにも注目した。その上で、そうした意識・価値観と「世間・運命観意識」との関連性について分析した。

研究成果の概要（英文）：In this project, we tried to analyze ‘cultural meanings and values’ associated with some of the important IIE(intercultural information ethics) topics in ‘Far East, i.e. ‘human and robot interaction(HRI)’ and ‘privacy.’ By focusing on these relatively newly emerging topics in ‘Far East,’ I will attempt to make the cultural *Ba*(locus/place where different meanings of things, events, people’s experiences come together; or frameworks for understanding meanings of phenomena and events) visible through analysis of research data done in Japan, Thailand and China in the past several years. These research data shown in this paper suggest, I believe, that we can’t understand people’s attitudes toward robots and privacy in ‘Far East’ without taking into consideration people’s broader views on ‘what is a good life?’ and ‘what is a virtuous life?’ which are, in turn, considered to be strongly combined to *Seiken*-related views.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度	0	0	0
年度	0	0	0
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：コミュニケーション・情報・メディア

1. 研究開始当初の背景

本研究の研究代表者は1983年以降、災害情報、

情報社会における人々の価値観の変容というテーマで研究を続け、さらに2002年以降、「情報社会の比較文化論的研究」、「情報倫理の比較文化論的研究」を主として欧米の研究者（Capurro、Ess、Britz、Nagenborg、Gutmannら）と共同で続け、さらに2007年以降は、中国、タイ、フィリピン、香港などのアジアの研究者と連携をとりながら研究を続けてきた。この一連の研究を通じて情報社会における人々の意識や価値判断、さまざまな問題、事象への共感のありかたを規定する（あるいはそれと連動する）、日本人特有の価値観・世界観（あるいは東アジア的価値観）の存在が明らかになり、また、次のような諸点が明らかにされてきた。ア）この世界観は「物質文明批判主義・現代文明批判主義」（的世界観）といったものと「間人主義・共生的人間関係指向」と呼ぶものの組み合わせで成り立つものである（「間人主義」とは浜口恵俊による言葉。西欧の個人主義に対し日本などの東洋では人と人の「間」、対人関係が重視されるという考え）。イ）この世界観（これは、暫定的に「世間・運命観図式」と呼ぶことにしている）は日本社会の二重構造と結びつく。（日本の人々の心は、近代的な社会構造の他に、より良い人生の意味、あるべき人間の姿などが重視され、それに連動する価値観・人間観、たとえば、「清貧の思想」＜人間は豊かになりすぎると精神的に墮落しがちなものだ＞などが重視され、共有される生活世界的側面の中にも根ざしている）。ウ）「世間・運命観図式」は、情報社会における人々（日本に生きる）の人生の認識、社会問題への関心、プライバシーや公共性の問題への倫理的判断、ロボットと人間の共生への共感や批判意識などと結びつく。エ）驚くべきことに、このような「世間・運命観図式」は予備的な調査を通じて、中国などでも人々の間で共有されているらし

いということが部分的に明らかになった。

2. 研究の目的

以上のような研究開始当初の背景、過去の研究成果を下敷きにして、本報告書で報告する研究のプランが計画された。具体的には、より広範な調査対象者に関する調査を実施すること、調査の対象を中国やタイなどにも広げること、ロボット倫理やHRI（ヒューマン・ロボット・インタクシオン）、HMI（ヒューマン・マシン・インタラクシオン）など、情報社会において注目されつつある（少なくとも欧米先進国においては）新しい問題についても、「世間・運命観」と関連させながら分析していくこと。

3. 研究の方法

主として、アンケート調査、インタビューという手法によって、当該テーマに関するデータを広く収集し、分析を行った。それをもとにさらに新たなアンケート調査、インタビューを実施するというやりかたで、分析の内容を深めていく努力をした。

この期間に実施した主要な調査は以下のとおりである（科研以外の研究資金をもとに実施した調査も含んでいる）。

2010S 調査=2010年に首都圏3大学（筑波大学、明治大学、東洋大学）の学生431人を対象に行った調査。2010CS 調査=2010年に中国の大学生367名を対象に実施した調査。調査対象は、広東工貿職業技術学院（Guangdong College of Industry and Commerce（Guangzhou, Guangdong Province））および吉首大学（Jishou University（Jishou, Hunan Province））。2010CG 調査=2010年の8月9日～同17日の期間、中国、北京、上海、広州の住民、男女481人を対象に行った（インターネット利用者）。調査対象者の数は中国の公式統計調査に基づき、事前に年齢別、性別ごとに割り当てた（割り当て法）。2011HG 調査=2011年8月19日から同21日まで期間、福島、宮城、岩

手（東日本大震災で被害を受けた都道府県の内、主要な被災として選んだ）県在住の 25 歳～44 歳までの住民 744 人（インターネット利用者）を対象。この調査は、2010 年に政府が実施したインターネット利用者調査に基づき、割り当て法で実施した（年代、性別ごとに調査対象者数を事前に割り当てた）。2011NS 調査＝2011 年 9 月 1 日～9 月 26 日の期間に筑波大学在籍の学生 123 人に実施した調査。主として 3 月 11 日以降の災害体験についてたずねた調査。質問内容は、筆者、井手弘子、松枝世の 3 人で検討し決定した。2011FS 調査＝「2011NS 調査」と同一の内容の調査を筑波大学在籍の外国人留学生 274 人を対象に実施した。実施期間も同一。2012TS 調査＝2012 年 1 月にタイで Chulalongkorn 大学（バンコク）在学中の 141 名の学生を対象に行った調査。

なお、比較のため、以下の過去の調査についても本報告書の中ではとりあげている。

1995G 調査＝1995 年に東京で実施（20 歳以上、587 人）。2000G 調査＝2000 年に首都圏で実施（20 歳以上、611 人）。2008G 調査＝2008 年に 25～44 歳の男女 500 人（インターネット利用者）を対象に実施した調査（年齢別、性別ごとの割り当て法＝インターネット利用者に関する政府の公式統計に基づく）。

これら一意の調査の詳しい内容、得られた知見については以下の文献を参照されたい。Nakada, Makoto(2006). Privacy and *Seiken* in Japanese information society: Privacy within *Seiken* as old and indigenous world of meaning in Japan. In *Cultural Attitudes towards Technology and Communication 2006* (F. Sudweeks, H. Hrachovec and C. Ess eds.), Perth: Murdoch University, pp. 564-579. Nakada, Makoto(2006). The Internet within *Seiken* as old and indigenous

world of meanings in Japan. In *Localizing the Internet* (R. Capurro, J. Fruebauer and T. Hausmanninger eds.), Munich, Fink Verlag, pp. 1-30, 2006.

4. 研究成果

(1) 本研究の研究代表者は、2002 年以降、「情報社会の比較文化論的研究」、「情報倫理の比較文化論的研究」を主として欧米の研究者（Capurro、Ess ら）と共同で続けてきたが、この研究を通じて日本人特有の価値観・世界観といったものの存在が浮かび上がってきた。この世界観は「物質文明批判主義・現代文明批判主義」（的世界観）といったものと「間人主義・共生的人間関係指向」と呼びうるものの組み合わせでできているものである。（間人主義というのは、濱口恵俊による造語で、個人主義に対するもの。）

このうち、「物質文明批判主義・現代文明批判主義」（的世界観）は、もともと、1981 年以降に本研究代表者が中心になって実施した一連の災害観調査（共同研究者、故廣井脩東大情報学環教授、1981 年当時は東大新聞研究所助手）によってその存在・役割が明らかになってきたものである。

具体的には、過去に研究代表者が日本で実施したさまざまな調査の結果次のような諸点が明らかにされてきた。1) 日本人は「運命観的見方」（人間には皆運命がある）、「物欲否定」（人間は豊かになりすぎると墮落しがちである）、「現代文明批判」（現代人は自然からあまりにも離れすぎてしまっている）、「利己主義批判」（先進国には利己主義的な人間が多すぎる）といった「物質文明批判主義・現代文明批判主義」（的世界観）を肯定する人が過半数を越える。これは物欲肯定、利己主義という現代日本人につきまとうステレオタイプイメージとはまったく正反対

の実態である。2) 日本人の生き方の中心には、「家族や友人などとの親密な人間関係」を生きがいとして指向し、「誠実であること」を重要視し、「互助的な人間観」（他人のために何かすることは自分にとっても良い結果をもたらすという考え）が位置する。3) こうした価値観・世界観が日本人の意識の中心にあるということすら驚くべきことだが、さらに驚くべきことには、このような「物質文明批判主義・現代文明批判主義」（的世界観）、「間人主義・共生的人間関係指向」的な意識は（この両者の組み合わせを以下、「精神主義・間人主義」（的世界観）と呼ぶことにする）、「インターネット観」、「政治意識」、「環境問題への関心」、「地域活性化への関心」、「原子力エネルギー、食の安全性などに関わるリスク認識・リスク観」、「プライバシー観」、「企業倫理」等と深く連動している点である。「精神主義・間人主義」（的世界観）とはある意味では、時代遅れで、インターネット、政治意識、その他公共問題への関心・意識とあまり関係がなさそうだが、調査結果によれば、そうした予想とはまったく逆の結果が出ているのである。つまり、「生活世界 Lebenswelt」（フッサール、シュッツ）という言葉を使えば、「精神主義・間人主義」（的世界観）は日本的な生活世界のありかたと深く重なり、その中にメディア観や、政治意識、公共問題等への関心が包み込まれているとも言える。精神医学でいう「関連体系」（昼田他）という言葉を使えば、「精神主義・間人主義」（的世界観）はメディア観や、政治意識、公共問題とともに一つの大きな「関連体系」（ガダマーの言う「意味の地平」）を構成していることになる。

さらに、本研究の研究代表者は、過去数年間、科研費等の補助を受けて、中国側の研究者の協力を仰ぎながら、中国の一般社会人、

学生の意識調査を行ってきたが、この研究を通じて驚くべきことに、中国の人々も、「物質文明批判主義・現代文明批判主義」（的世界観）、「運命観」、「間人主義的人間観」など、日本人ときわめて似た人間観・世界観をもっていることが明らかになってきた。こうした意識がたぶん儒教、道教、仏教経由のものであることを考えると、日中二か国の価値観の類似性はさして「驚くべきこと」ではないかもしれない。しかし、注目すべき点は、中国においても、インターネット観、プライバシー観は、日本と同様、「精神主義・間人主義」と強い関連性（統計的な）を有することが調査によって明らかになったことである。精神医学の言葉を使えば、異質なレベルの関連体系（近代的・技術的なものと伝統的なもの）がここで融合していることになる。

こうした知見は、国際的に評価が高い *Ethics and Information Technology* 誌の「アジアのプライバシー特集号」などに掲載された本研究・研究代表者の論文や、国際会議の場（2008年3月にハノイで行なわれたユネスコ主催のアジア・太平洋地域情報倫理ワークショップなど）でのプレゼンテーションなどを通じて公表されてきたが、海外では大きな反響を呼ぶものとなった。

われわれ東洋の人間は、長い間、「西洋」から借用した理念や用語で、メディア論にしても、情報社会論にしても、論じてきたが、こうしたわれわれの研究を通じて、情報社会論や情報倫理に関しては、ようやく自分たちの言葉や視点で問題の所在を語るができる手掛かりを（部分的にせよ）得たことになる。

平成22年度～平成24年度の研究（本報告書はその研究の成果を報告することを目的とするものである）は、以上の知見をもとに、

日本や他の東アジアの国（中国など）を対象に、調査対象者の範囲を広げ、情報社会における人々の価値観、人生、社会への指向性のあるかた、中身をより深く掘り下げてみようとするものであった。具体的には、ロボット倫理、プライバシー倫理、企業倫理のあり方など、情報社会における人々の意識のありかた、倫理観と深く連動すると思われる項目をとりあげ、その内容を、調査データ等に基づき、詳しく検討するとともに、「物質文明批判主義・現代文明批判主義」（的世界観）、「間人主義的人間観」、公共性の意識のありかたなどに関連させてとらえようとするものであった。さらに、この間に発生した東日本大震災、原発事故の重大性と本研究の研究の出発であった災害調査の意味についてもあらためて検討するため、調査項目の対象に加えた（一部の調査で）。

(2) 以下、本研究課題に基づく調査（さらにそれと連動するかたちで行われた一連の調査）（両者を厳密に区別して提示することは難しい）およびその分析によって明らかになった知見のうち、主要な項目を整理して提示する。

(3) 「世間・運命論」的価値観の存在が引き続き、日本や中国で確認された。また、限定的なデータに基づくものであるが、タイでも日本と類似した価値観の存在が認められた。

(4) 「世間・運命観」とプライバシー観、ロボット倫理に関する意識との相関。「世間・運命観」とプライバシー観、ロボット倫理に関する意識との相関（因子分析の結果得られた因子）について分析した結果、日本、中国、タイ（タイのデータはサンプル数が少ないので継続調査が必要）、どの国でも、これらの項目間に統計的に有意な相関関係があることが明らかになった。

5. 主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 17 件）

- ① Nakada, M. and Capurro, R. (2013) . An intercultural dialogue on roboethics. In Nakada.M. and Capurro, R.(Eds.), *The Quest for Information Ethics and Roboethics in East and West* (比較情報倫理研究) , vol.1.pp.13-22. 「査読あり」
- ② Nakada, Makoto(2012). “Robots and Privacy in Japanese, Thai and Chinese cultures:Discussions on Robots and Privacy As Topics of Intercultural Information Ethics in ‘Far East’,”In Fay Sudweeks, Herbert Hrachovec and Charles Ess(eds.) *Cultural Attitudes towards Technology and Communication 2012*. Murdoch University, Murdoch, pp.200-215. 「査読有り」
- ③ Nakada, Makoto(2011) , “Japanese views on privacy and robots in Japanese ethical Ba(place),” in Jeremy Mauger (Ed.). *INSEIT 2011*, published bt INSEIT,pp.208-202. 「査読有り」

〔学会発表〕（計 10 件）

- ① Makoto Nakada, Robots and Privacy in Japanese, Thai and Chinese cultures Discussions on Robots and Privacy As Topics of Intercultural Information Ethics in ‘Far East’cultural attitudes towards technology and communication (CATaC) Aarhus, Denmark, 18th-20th June, 2012

② Makoto Nakada, Japanese *Seiken*-Views on Privacy and Robots: Before and After March 11, 2011, CEPE 2011 : Crossing boundaries: Ethics in Interdisciplinary and Intercultural Relations. The Hilton Milwaukee City Center, USA, 31 May-2 June

[図書] (計2件)

① Nakada, Makoto(2011). "Ethical and critical views on studies on robots and roboethics," in Michael Decker and Mathias Gutmann(Eds.), *Robo-and Informationethics: Some Fundamentals*, Berlin:Lit Verlag, pp.157-186. 「査読有り」

② Capurro , R. and Nakada, M. (2011). A Dialogue on Intercultural Angeletics. In Rafael Capurro & John Holgate(eds): Messages and Messengers. Munich: Fink Verlag , 67-84.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

仲田 誠 (NAKADA MAKOTO)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：50172341

(2) 研究分担者

海後 宗男 (KAIGO MUNE0)
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号：60281317
石井 健一 (ISHII KENICHI)
筑波大学・システム情報系・准教授
研究者番号：90193250